さきがけNIEワークシート
中学生版
2024年11月17日発行　第3号

年　組　名前

# 布片の活用通じ、人の「心」考える

秋田美大教授の収集品展示

布片（ふへん）の生かし方を通して、人の創造力や心のありようを探る企画展「布キレの日本文化誌」が秋田市新屋のアトリエももさだで開かれている。江戸時代から戦前までに作られた衣服など90点を展示。制作の技術や意図などを知ろうと、来場者が熱心に鑑賞していた。19日まで。

展示されているのは、秋田公立美術大の佐治ゆかり教授（博物館学、日本美術史）が30年ほどかけて集めた全国各地の品々。色とりどりの布片をはぎ合わせて作ったじゅばんや着物、宗教的儀式などで寺に米を持って行くために作った「米袋」、使い古しの布片を継ぎはぎした「襤褸（ぼろ）」の仕事着などが並ぶ。

このうち、子どもの着物には、健やかな成長を願う「背守（せまもり）」が縫い付けられている。背中に縫い目のない子どもの着物は、背中から魔が忍び込むとされたため、魔よけなどのために付けられた。亀甲模様やネコなどさまざまな背守があり、子どもを思う気持ちが伝わってくる。

13日には展示品解説が行われ、佐治教授は「『継ぐ』『はぐ』という技術の先にある精神性を感じてほしい」「襤褸からは、抽象絵画のような美しさが感じられる。創作に携わる若い人たちの発想の参考になるのでは」などと語った。

色とりどりの布片で作られた衣服などを紹介する「布キレの日本文化誌」展

秋田魁新報2024年10月16日付より

**1**

本文中の「『継ぐ』『はぐ』という技術」は、現代でも服飾の技法としてよく使われています。次の言葉の意味を参考にして、その技法の名称を、本文中から四文字で抜き出しましょう。

継ぐ…衣類の破れをつくろう
はぐ…布などを継ぎ合わせる

□□□□

**2**

記事中に用いられた複合語を、次のア～エのように言い切りの形にしました。このうち、言葉の組み立てが他と異なるものを一つ選んで記号で答えましょう。

ア　はぎ合わせる　　イ　縫い付ける　　ウ　忍び込む　　エ　魔よけ

□

**3**

見出しで用いられている「心」について、次の(1)(2)の問いに答えましょう。

(1)「心」とかぎかっこを用いて表現しているのは、布片の活用から感じられる二つの特長を強調するためです。その二つの特長を、本文中からそれぞれ漢字三文字で抜き出しましょう。

□□□と□□□

(2)「心」を辞書で調べると、次の①～③の意味がありました。この記事で使われている「心」の意味は、どれが最もふさわしいと考えますか。本文の内容を根拠にして理由を考え、六十字以内で書きましょう。

① 人間の体に宿り、知識・感情・意志などの働きのもとになると考えられるもの。
② 芸能・芸術などのもつ深い意味、理念。
③ 問いに対する答えの意味。

答え □

60字

**4**

取材した記者は、「背守」について下のA亀甲・Bネコの写真を撮影しました。もしこの記事にどちらか一枚を使うとしたら、どちらに、どのようなキャプション（図や写真に添えた説明またはタイトル）を付けて使いますか。記事中のキャプションを参考にして、三十五字以内で書きましょう。

A　亀甲

B　ネコ

選んだ写真の記号を○で囲みましょう。

35字

（裏面に続く）

出題：京野真樹（秋田大学付属小副校長）、監修：伊藤一（日本国語教育学会秋田支部・常任理事）

5

記事で取り上げられた企画展のチラシには、次のような文章が書いてありました。記事の内容や次の文章を参考にしながら、①～③からテーマを一つ選んで、四百字以内で自分の考えを書きましょう。

【チラシの文章】

人々はどんな小さな布キレも大切にとっておいて、着物の補修や補強、飾りに用いた。

時には一枚の布の小片を手にしながら、それを生み出した人や世界に想いを馳せることもあっただろう。

また、布を並べて、飽かず眺めては、何を作ろうかと、心弾む時間を持ったことだろう。

布を小さな断片で見ていくと、産地・流通・需要の様相、人々の布に対するこだわりや美意識、手仕事の豊かさ、宗教観や人生観までもが見えてくる。

この展示は、デザインやファッションの側面ではなく、小さな布片と日本人の関り方、生かし方をとおして日常のうちに自ずと表れる創造力、想像力、日本文化の深層について探ろうとするものである。

日本人の衣をめぐる知恵や行為は、疲弊する地球環境、加速する消費社会において、今まさに求められている持続可能な生き方、姿勢、実践のかたちでもある。

【テーマ】

① 記事やチラシを読み衣生活に対する自分の考えが変わったこと

② 持続可能な社会と衣生活との関係について考えたこと

③ 日本の文化・伝統と衣生活との関係について考えたこと

## 布片の活用通じ、人の「心」考える

### 秋田美大教授の収集品展示

布片（ふへん）の生かし方を通して、人の創造力や心のありようを探る企画展「布キレの日本文化誌」が秋田市新屋のアトリエでもさだで開かれている。江戸時代から戦前までに作られた衣服など90点を展示。制作の技術や意図などを知ろうと、来場者が熱心に鑑賞していた。19日まで。

展示されているのは、秋田公立美術大の佐治ゆかり教授（博物館学、日本美術史）が30年ほどかけて集めた全国各地の品々。色とりどりの布片をはぎ合わせて作ったじゅばんや着物、宗教的儀式などで寺に米を持って行くために作った「米袋」、使い古しの布片を継ぎはぎした「襤褸（ぼろ）」の仕事着などが並ぶ。

このうち、子どもの着物には、健やかな成長を願う「背守（せまもり）」が縫い付けられている。背中に縫い目のない子どもの着物は、背中から魔が忍び込むとされたため、魔よけなどのために付けられた。亀甲模様やネコなどさまざまな背守があり、子どもを思う気持ちが伝わってくる。

13日には展示品解説が行われ、佐治教授は「『継ぐ』『はぐ』という技術の先にある精神性を感じてほしい」「襤褸からは、抽象絵画のような美しさが感じられる。創作に携わる若い人たちの発想の参考になるのでは」などと語った。

テーマ

出題：京野真樹（秋田大学付属小副校長）、監修：伊藤一（日本国語教育学会秋田支部・常任理事）